

復活節第2主日礼拝説教「まだ見ていないのか？」予稿

日本基督教団石神井教会 2024年4月7日

【使徒書日課】ペトロの手紙一 1章3～9節

³わたしたちの主イエス・キリストの父である神が、ほめたたえられますように。神は豊かな憐れみにより、わたしたちを新たに生まれさせ、死者の中からのイエス・キリストの復活によって、生き生きとした希望を与え、⁴また、あなたがたのために天に蓄えられている、朽ちず、汚れず、しぼまない財産を受け継ぐ者としてくださいました。⁵あなたがたは、終わりの時に現されるように準備されている救いを受けるために、神の力により、信仰によって守られています。⁶それゆえ、あなたがたは、心から喜んでいるのです。今しばらくの間、いろいろな試練に悩まねばならないかもしれませんが、⁷あなたがたの信仰は、その試練によって本物と証明され、火で精錬されながらも朽ちるほかない金よりはるかに尊くて、イエス・キリストが現れるときには、称賛と光栄と誉れとをもたらすのです。⁸あなたがたは、キリストを見たことがないのに愛し、今見なくても信じており、言葉では言い尽くせないすばらしい喜びに満ちあふれています。⁹それは、あなたがたが信仰の実りとして魂の救いを受けているからです。

【福音書日課】ヨハネによる福音書 20章19～31節

¹⁹その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。²⁰そう言って、手とわき腹とをお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ。²¹イエスは重ねて言われた。「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」²²そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。²³だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」

²⁴十二人の一人でディディモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。²⁵そこで、ほかの弟子たちが、「わたしたちは主を見た」と言うので、トマスは言った。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」²⁶さて八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。戸にはみな鍵がかけてあったのに、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに

平和があるように」と言われた。²⁷それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」²⁸トマスは答えて、「わたしの主、わたしの神よ」と言った。²⁹イエスはトマスに言われた。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」

³⁰このほかにも、イエスは弟子たちの前で、多くのしるしをなさったが、それはこの書物に書かれていない。³¹これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。

「あなたがたに平和」【こども説教のために】

わたしたちは先週の日曜日、「イースター（復活祭）」を祝い、「主はよみがえられました」、「主は本当にご復活なさいました」と挨拶を交わしました。今日もわたしたちは、「イースター」を祝うために教会に集められてきたのです。すでに「主はよみがえられました」と挨拶を交わした者に加えて、まだその挨拶をしていない者が共に挨拶を交わせるようになるためです。

ご復活された主イエスに最初にお会いしたのは、女の弟子、マグダラのマリアでした。主イエスが葬られているはずの墓の中ではなく、その外で、マリアは主イエスとお会いしたのです。マリアは、大急ぎで弟子たちのところへ行って、「わたしは主を見ました」（ヨハネ 20:18）と報告しました。日曜日の朝のことです。

その日の夕方、弟子たちは一つの家に集まっていました。家の戸には鍵をかけていましたが、彼らの真ん中に主イエスがお出でになりました。「あなたがたに平和があるように」と言われて、主イエスは、十字架で釘打たれた手と、槍で刺されたわき腹をお見せになりましたのです。

そのとき一緒に居なかった弟子が一人いました。トマスです。トマスは、仲間の話を聞いても信じられませんでした。次の日曜日は、仲間の弟子たちと一緒に家に集まることにしました。トマスは、そこで主イエスとお会いすることができました。主イエスは、そのときもトマスと弟子たちに、「あなたがたに平和があるように」とおっしゃってくださいましたのです。

そのときから、弟子たちの教会は、日曜日ごとにご復活の主とお会いしてきました。弟子たちの集まりに遅れて来た者は、日曜日の教会でご復活の主とお会いするようにされてきたのです。その日曜日ごとの集まりは、今に至るまで続いています。わたしたちも、日曜日の教会で、今日もご復活の主とお会いして、「主はよみがえられました」と挨拶を交わしているのです。

「わたしたちは主を見た」

古い時代、主のご復活を祝う中で洗礼を執り行うようにした教会では、洗礼を受けて真新しい白い衣を着せられた者たちを一週間、先輩信者らと共に教会に留まらせるということを実践していたようです。キリストに従う者として身に着けるべき最低限の習慣を身に着けるためだったと言われますが、わたしは、それだけの理由ではなかったように思います。教会の集まり、その交わりの中でご復活の主を見るようにされてきた先輩信者たちと共にいさせることで、彼らが確かにご復活の主を見るようにされることを願い、促してのことだったのではないかと思うのです。洗礼を受けたばかりの者を一人にしてしまうならば、あの「トマス」のような思いをさせてしまうことになりかねないと、先人たちは教えられていたに違いないからです。

先週の「イースター（復活祭）」の祝いの中で、わたしたちの教会でも一人の方が洗礼を受け、信者としての歩みを始められました。同じように洗礼を受けられた方が、世界中にいらっしゃることでしょう。その方たちは、今日、八日目の日曜日に、教会の集まりにどれほど加わられていることでしょうか。迷い出てしまうことなく日曜日の教会の交わりの中に置かれて、ご復活の主を見るようにされているのでしょうか。「あなたがたに平和があるように」とお告げくださる主の御言葉を、共に聞く者とされているのでしょうか。

もっとも、わたしは、「トマス」のように仲間の弟子たちから離れて一人で行動することを、一概に否定する必要はないと思います。トマスは、ある意味で熱心な者だったと思うのです。他の弟子たちと歩調を合わせるのは苦手であったかもしれませんが、ご復活の主とお会いしたくなかったわけではないでしょう。むしろ、ご復活の主を捜して、あちらこちら訪ね歩いていたのではないのでしょうか。トマスも、マグダラのマリアの「わたしは主を見ました」という報告を聞いていたのです。

わたしたちは、日曜日の教会でご復活の主とお会いする、と当たり前のように言います。けれども、皆さんの中には、そう告げられることに抵抗を感じる方もあるでしょう。本当のところ、信者であっても、日曜日の礼拝でご復活の主とお会いしている、とはっきりおっしゃる方は少ないかもしれません。信者でない方であれば、なおさらではないのでしょうか。それどころか、日曜日の教会に集まっている人たちの姿を見て、躓きさえするかもしれません。とてもキリストに従っているとは思えないような振る舞いを見せたり、ご復活の主がここにいらっしゃるとしたらあり得ないような言動を平気でしたりということが、日曜日の教会でも見られるからです。「教会に行くとは躓くので、一人で家庭礼拝をします」という方さえ、いらっしゃるのです。敢えてオンライン礼拝を選ぶ方が、いらっしゃるのです。

「見たから信じた」

そういう教会の現実を知ってのことだと思いますが、先輩たちの中には、「人を見ないで、神を見なさい」と教える方々がありました。大勢が集まる教会の礼拝に来て、周囲の人には目もくれず、ひたすら神を礼拝することに集中するように、と言うのです。教会活動への参加は深入りし過ぎないようにして、人間関係でトラブルになるようなことは避けるように、と言うのです。それは、一つの知恵として教えられていたのかもしれませんが。

けれども、主イエスがお教えになられたのは、果たしてそういうものだったのでしょうか。主イエスは、むしろ、「人を見る」ことをお教えだったのではないのでしょうか。「人」であるご自分を見るようにと、おっしゃられたのではなかったのでしょうか。「人」であるご自分を見る者が天の「父」を見ている、と言われたのではなかったのでしょうか。

だからこそ、マリアは、「わたしは主を見ました」と言ったのでしょうか。弟子たちも、「わたしたちは主を見た」と言ったのでしょうか。そのお方は、「人」なのです。手には釘で打たれた傷跡があり、わき腹には槍で突かれた刺し傷のある、「人」でした。神々しい傷のないお方ではなく、「人」として傷を負われたお方を、彼らは見るようにされたのです。

そのようなお方は、どこか聖なる地に鎮座されているわけではないのでしょうか。むしろ、「人々」の中にいらっしゃるのです。「人々」と共にいらっしゃるのです。「人々」の交わりの中で、そのお姿をお見せになられるのです、「人々」の一人として。

弟子たちの見た手の傷は、誰の傷だったのでしょうか。わき腹の傷は、誰の傷だったのでしょうか。トマスが一人でいたときには見ることはできなかった手の傷は、どこで見るようになったのでしょうか。トマスが見たわき腹の傷は、弟子たちのいるところで見た傷だったのではないのでしょうか。そこで彼らが見たものこそが、ご復活の主のお姿だったのではないのでしょうか。

ご復活の祝いの中で洗礼を受けた者に、使徒は教えていました、「キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受けた」（ローマ 6:3）と。キリストと結ばれた者たちは、共に集まるとき、ご復活の主を見るようにされるのです。たとえ「キリストを見たことがない」としても、日曜日の教会には、キリストと結ばれるために洗礼を授けられた者たちがいるのです。ここに、ご復活の主は現れてくださっています。真ん中にお立ちくださり、そのお姿をお見せくださっています。傷だらけのお姿を、わたしたちと同じように欠け多いお姿を。それは、わたしたちの姿なのです。

今やそのような姿の者に、主は、「**聖霊を受けなさい**」とお告げです。「**あなたがたを遣わす**」とお告げなのです。